



小郡市立三国中学校だより

一心一意

令和7年2月13日

第18号

校長 山本 拓

「自分や周りの人の人権について考え、共により良い生活を送るためには どうしたらよいかを考える日」～2・7 人権学習～



2月7日(金)は、人権を考える日でした。1, 2年生は一齐に1, 2時間目を使って人権学習を行いました。3年生は、その日は福岡地区の私立高校前期入試だったために、後日行います。先生たちが学年の話合いで練り上げた授業を気持ちを込めて行っていました。どのクラスの子どもたちも真剣に授業に参加してくれていました。授業を終えて、2年生の感想を紹介します。

・私は、周りの人に見られるのが怖くなって、本当はもっと活発なのに、静かでおとなしくなろうと思ひ努力していた。しかし、「本当の性格」というものはやっぱりがまんできずに外に出てしまう。それにずっと悩んでいた。でも、今日の授業でそんな悩みがもうどうでもよくなった気がした。ありのままの自分でいられるように自分を受け入れようと思った。

・本当に色々な個性を持った人がいるんだなと思いました。今まではLGBTQ+についてよく知らなかったもので、少数派で周りの人がその人を認めてくれずつらい思いをしている人がいる。ということを知って良かったです。学習を通して、その人を否定し、拒絶するのではなく、その人を尊重し、認めることがとても大切だと思いました。これからの生活の中で、そういう人たちに会ったときにどう接していくのか、家に帰っても考えてみようと思います。また、「認める」中で何か変に特別に接するのではなく、普通に接することこそが認めるということなのかと思いました。今日学んだことをこれからの生活に生かし、有言実行していきたいと思います。

「三国中校区人権のまちづくり交流会」～1年生 益永芭子さん発表～



1月25日(土)にふれあい館三国で三国中校区人権のまちづくり交流会が開催されました。当日は、市長さんをはじめ、各区の区長さんや地域のみなさん、小中学校の先生方などが出席する中で、1年生の益永芭子さんが「思いやりのある話し方で」という題の作文を発表しました。益永さんは、昨年11月2日に行われたおごおりっ子からのメッセージにも出場し、作文の内容や表現力で会場の人たちに感動を与えてくれました。この交流会でも益永さんのすばらしい発表で会場が感動の渦につつまれました。とてもすてきなメッセージをありがとうございました。

「筑後地区代表として誇れるたすきリレー」～県新人駅伝大会出場～

2月8日(土)に博多の森陸上競技場周回コースにおいて、第39回福岡県中学校新人駅伝大会が行われました。筑後地区の代表として本校の特設女子駅伝部が出場しました。起伏が激しいコースで、県内の精鋭が集まる中、それぞれがベストを尽くし、地区新人大会よりチームで1分以上早いすばしいたすきリレーを見せてくれました。本番前は、雪のために思うように練習ができず調整が難しかったと思いますが、最後まであきらめない走りに感動しました。ありがとうございました。結果は、次のとおりです。



区	名前	タイム
第1区	西村莉緒さん	7:13
第2区	岸川明香里さん	8:39
第3区	岸原美依さん	7:51
第4区	久保美月さん	7:40
第5区	天野結月さん	6:58
チーム記録 38"21		

「物語を創作しよう」～1年生国語科の授業～

1年生の国語科の授業で子どもたちが、物語の創作をしています。担当の先生から、「この創作文を読んで涙が出ました。」と紹介していただきました。私もこの松浦恵那さんの作品を読み、命について本当に考えさせられる作品だと思いましたので、みなさんに紹介させていただきます。

殺処分された犬 1年3組 松浦 えな

僕は、ペットショップで生まれた。生まれてから三か月たったころ、僕は店頭で並んだ。しかし、僕は全然売れなかった。道行く人は僕を見ても微妙な顔をして去っていく。僕はとても悲しかった。僕より後に入ってきた犬や猫たちが自分よりも先に買われていく。でも、僕はある人のおかげで支えられた。僕のお世話を担当していた酒井さんというおじさんだ。酒井さんは僕が悲しんでいるといつも気づいて、優しくなでてくれた。僕はそんな酒井さんが世界で一番大好きだ。だから、別に買われなくていいと思っていた。

店頭で並んでから一年と二か月がたったころ、僕はゲージに入れられた。買われなくてもいいとさえ思っていたが、本当は買ってもらいたかったのだろう。ついに僕は買われたのかとうれしく思って、大きく吠えた。そんな僕を見て、酒井さんは泣いていた。そんなに僕のことが好きだったのかとまんざらでもない気持ちになった。

いよいよ出発みたいだ。強面のおじさんの軽トラに乗せられて運ばれた。この人が僕の飼い主さんか。これからの生活に期待と希望を抱きながら外を眺めた。

着いたかと思えば、すぐに薄暗い檻の中に入れられた。他にも衰弱している犬や、人間に恐怖心を抱いている犬などたくさんいた。僕は違和感を抱いた。飼い主だと思っていた強面のおじさんは檻に入れたっきり帰ってこない。僕が入れられている場所はとても狭く、コンクリートに囲まれていて毛布もおもちゃも何もないし、あるのは水の入った容器だけ、飼われているのには扱いがひどくないか？飼われたらもっと愛情を注がれるのではないの？と僕は疑問に思った。

時間が少し経った頃、飼い主さんではない女の人からご飯をもらった。そのご飯はこれまで食べてきた中で一番おいしいご飯だった。休みもせずひたすらに食べていると、女の人が僕を見て泣いていた。それに疑問は感じたものの、目の前のごちそうを夢中になって食べた。これが最後のご飯だったとは知らずに。

夕方ごろになったころ僕は檻の外に出されて、コンクリートに囲まれた部屋に入れられた。僕の他にもたくさん犬や猫がいた。ぎゅうぎゅうになるほど入れられた後、僕たちが入ってきた小さな入り口が閉じられた。これから何が起きるんだ？僕の心は恐怖心に満ちて吠えた。だんだん息苦しくなってきた。もう吠えることができない。僕はもう死ぬんだと気づいた。せめて、名前を付けられたかったなあと心の中でつぶやいた後、ぱたりと倒れた。二歳の誕生日を迎えることはなく、僕は死んだ。

人間世界のエゴによって命を絶たされた犬の話で、心が痛む結末でした。現在は、動物を保護する団体も多くなり、保護犬や保護猫に対する意識も大きく変わってきたようです。過去10年間をみると殺処分は、24万頭減ったというデータがあります。しかし、数が減ったとはいえ、殺処分が行われていることは現実にあるのです。犬も猫も人間も地球上のすべての生き物に命があります。「死ね」なんていう言葉を簡単に発する人がいますが、私はそういう話を聞くと悲しくなるし、その言葉を発した人を哀れに思います。命の尊さを見るととても口に出せないし、「死ね」などと考えることも大変おかしいことです。

命について深く考える機会を与えていただく作品をありがとうございました。